2021年度一般入試C入学試験問題

国　　語【看護学部】

（2月8日）

開始時刻　午後1時00分
終了時刻　午後2時00分

※　数学の問題は、本冊子の左開きのページにあります。

注意事項

1. 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。
2. この冊子は19ページです。落丁、乱丁、印刷の不鮮明及び解答用紙の汚れなどがあった場合には申し出てください。
3. 国語か数学のどちらか1科目を選択し、該当する解答用紙を切り離して解答してください。2科目とも解答した場合は、すべて無効となります。

   国　　語　1～16ページ
4. 解答用紙には解答欄以外に次の記入欄があるので、監督者の指示に従って、それぞれ正しく記入し、マークしてください。

   ①　受験番号欄

   受験番号を記入し、さらにその下のマーク欄にマークしてください。正しくマークされていない場合は、採点できないことがあります。

   ②　氏名欄

   氏名とフリガナを記入してください。
5. 解答は解答用紙の解答欄にマークしてください。例えば、［10］と表示のある問いに対してⓒと解答する場合は、次の（例）のように解答番号10の解答欄のⓒにマークしてください。

   （例）

10	ⓐ	ⓑ	ⓒ	ⓓ	ⓔ
6. 問題冊子の余白等は適宜利用してもかまいません。
7. 試験終了後、問題冊子は持ち帰ってください。

一

次の文章を読んで、後の**問一**～**八**に答えなさい。

自己矜持（きょう）という伝統的な考えによれば、知的に自律しているためには、他者の証言は信用できないため、証言から得た信念は自分自身で反省的に正当化しない限り、受け入れてはいけない。しかし、他者の証言が信用できないというのは本当なのだろうか。その一方で、自分で正当化した信念は信用できるとしたら、それはなぜなのだろうか。本節では、知的自律性と認識的依存との関係についての以上の問題について検討する。

社会認識論の観点から右のような知的自律性の問題についてアプローチする代表的な哲学者がフリッカーだ。まず、彼女の議論の流れに沿って知的自律性についての見解を示し、次に、その考えに対する利点と問題点を評価しよう。フリッカーは、知的自律性に対する古典的な見方を同定することから議論を始める。A自己矜持としての知的自律性という考え方について、次のように説明する。

完全に自律的な認識の主体は、いかなる命題も自分自身で理由をもたない限り、受け入れない。それゆえ、そのような人は、どの命題に対しても他の人の発言を基にして受け入れることはない。たとえ当の話題となっていることについて相手が信用できるという証拠を持っているとしても、受け入れはしないだろう。

知的に自律しているためには、どのような信念も自分で正当化するまで信用してはいけない。知的自律性に対するこのような考え方は、とくに近代の啓蒙（もう）時代の哲学者たちによって、明示的か非明示的かを問わず支持されていた。たとえば、デカルトの『方法序説』の一節にそれを認めることができると思われる。少年のデカルトは、生活にかかわるあらゆる事柄に関して、明晰（せき）で確実な知識を手に入れることを熱望したが、やがて当時出回っていた書物の中に確実とは言えない内容や虚偽を見つけて落胆してしまう。そして、デカルト少年は、他人の証言を寄せ集めた書物から学ぶことでは真理に近づくことはできないと考えるに至る。また、デカルト少年を教えた教師の証言の中にも相異なる内容が多く含まれていたため、それらを信用して自分の判断に活用することもヒカ（ア）えるべきだと考えるようになる。このようなシナリオでは、デカルトが他者の証言から獲得してきた信念を［　X　］を決意したことは、知識獲得のための賢明な判断であるように聞こえる。そして、一見すると、デカルト少年と同じことをする者こそ、知的に自律していると言えるように思われてくる。【①】

しかし、フリッカーによればこのような古典的な見方に隠されている前提について問いほぐさなければならない。フリッカーがまず注目するのが、全能の存在者の場合と人間の場合における知的自律性の理念の区別だ。「全能の存在者」とは、世界で起きるあらゆる出来事を正確に観察する認識能

力をもち、推論などの認知作業をつねに一切の誤りを犯さないで行う能力をもつ者のこととされる。このような存在者なら、他の存在者の証言に依拠しなくても直接に真理を獲得することができ、このような存在者を知的自律性の理念とするなら、自己矜持としての知的自律性はぴったり当てはまるだろう。【②】

それに対して、人間は個人差や程度差があるものの、感覚・知覚器官に限界があり、外界を写真機のように正確に観察することができるわけではない。さらに、推論のような認知作業や記憶内容でも誤りを犯すことがある。たとえば、会社の同僚の名前や電話番号をすべて自分で覚えておくことは難しいし、複雑な計算を一人で行うと、誤ってしまうこともある。このように、人間は生来、自分の感覚・知覚器官や認知能力に関して制約されている。【③】

このことを踏まえて、先ほどのデカルトの事例を再度、考えよう。なるほど、書物の記述や教師の発言から得た信念には誤りが含まれることがあることは認められる。しかし、デカルト自身による反省に基づいて正当化された信念に誤りが含まれないとは言いきれない。そして、先ほど確認したように、人間の誤りうる認識能力を考えると、他者の証言を一切信用せず、自分で正当化した信念にのみ信用を置くことは知識を獲得するための賢明な態度とは言えない。このことから、フリッカーは、自己矜持としての知的自律性の理念は、人間にとっては非合理的であると主張する。【④】

詳細に検討してみれば、人間が知的自律を望むことは理念ではなく、病的に疑(うたぐ)り深い人や認知的に深刻な欠陥があるか、それとも、合理的な観点から見てひどく非整合的である。私たちはみな、自分の周りにいる人が自分よりも特定の事柄を判断するのにより良い位置にいることが明らかな場合でも、相手の証言に対応するとき、非合理的に自分の意見に頑(かたく)なに固執する場面があることを思い出すことができよう。個人の自律の理念というのは、このような非合理な傾向を極限まで推し進めたものと言える。【⑤】

全能の存在者とも、他の動物とも異なり、人間は、他者の証言を疑うと同時に信用しながら知識を獲得したり、伝達する。たしかに、他者の証言には偽の信念が含まれることがあり、そのことだけを取り出して考えると、証言の受け手としての私たちは認識的に安全ではなくなるように見える。しかし、他者の証言への依存を考えるときには、自分で正当化した信念にはどれだけ信用を置くことができるのかということを合わせて考える必要がある。また、認識的依存の別の側面として、人によって得意な認知作業が異なることや、記憶力の良い人もいればタクエツした推論スキルをもっている人がいること、あるいは、特定の専門的知識をもつ専門家がいることを考慮に入れなければならない。しかし、自己矜持としての知的自律性という古典的な考え方に従うなら、知的に自律している者は、自分より感覚・知覚器官が鋭い人や、推論などの認知作業の得意な他者に認識的に依拠すること

さえ許されなくなってしまう。

フリッカーの議論は、私たち人間の認知機能の特徴をセイサ[ウ]することで、人間の知的自律性の個人相互の側面を詳しく検討するべきことを示している。知的自律性の問題は、「人間の認知機能の特徴を踏まえると、[B]知的に自律するとはどのようなことなのか」というものになる。フリッカーはこの問題に明確な答えを与えてはいないものの、次の内容を示唆している。すなわち、「認識的に自己管理を維持するために大事なのは、他者の言葉に対する信用は盲目的に与えられるのでもなければ、普遍的に与えられるのでもなく、場合に応じて違いが分かるという仕方で与えられることである」。たとえば、知的に自律しているためには、信念の受け手として、特定の情報に関して信頼の置ける人とそうでない人とを識別したり、インターネット上の情報のように、信用度を図りかねる場合には一歩引いて保留しておくという姿勢を備えていなければならないかもしれない。対応の仕方に一定の［Y］があるわけではなく、様々な場合に応じた他者への適切な認識的依存が、感覚・知覚器官や認知機能に制約のある私たちが知的に自律していくためには必要だと考えられる。

他方で、フリッカーの示唆する知的自律性についての考えに対して疑問も湧く。フリッカーは、知的自律性を保つために、信頼できる他者を見極め認識的に適切に依存することの重要性を説くが、それは決して、自分自身で反省的に考えること自体が重要ではないことを主張するものではない。本書はこれまで、問いほぐしながら考えることについて論じてきたが、問いほぐしの中でも知的自律性は重要だろう。問いほぐしの中で私たちは、［Z］だけではなく、他者との非対称的な社会関係の中で適切な仕方で共に問いほぐしながら考える点について検討する必要があるのではないだろうか。そうすることで、私たち市民の立場を専門家のヒエラルキーの下ではなく、異なる立場として位置づけて知識獲得を目指す社会の中の知的自律性を考えることができると思われる。

（佐藤邦政『善い学びとはなにか　〈問いほぐし〉と〈知の正義〉の教育哲学』による。設問の関係上、本文を改めたところがある。）

問一　傍線部ア～ウの漢字と同じ漢字を含むものを、次の各群の選択肢からそれぞれ一つずつ選び、解答欄の記号をマークしなさい。解答番号は、アが［1］、イが［2］、ウが［3］。

ア　ヒカえる
ⓐ 大臣をコウテツする
ⓑ 些細なことにコウデイする
ⓒ 扶養コウジョを受ける
ⓓ シュコウしがたい意見
ⓔ コウボウをかけた戦い

イ　タクエツ
ⓐ 商品をタクハイしてもらう
ⓑ 決議がサイタクされる
ⓒ シンタクが下る
ⓓ 磨いてコウタクを出す
ⓔ ショクタクを囲む

ウ　セイサ
ⓐ 当局のササツが入る
ⓑ ホッサが起こる
ⓒ シサを受ける
ⓓ 工場をヘイサする
ⓔ 何のオトサタもない

問二　傍線部A「自己矜持としての知的自律性という考え方」とあるが、これに関してフリッカーはどのように考えているのか。その説明として最も適切なものを、次の選択肢から一つ選び、解答欄の記号をマークしなさい。解答番号は［4］。

ⓐ 人間は自己矜持としての知的自律性を目指すよりも、自分より信用できる優れた者に依拠する方が合理的で賢明な態度であると考えている。
ⓑ 人間の生得的な感官や認知能力は万能ではないため、自己矜持としての知的自律性を望むことは本来のあるべき姿ではないと考えている。
ⓒ 人間は明晰で確実な知識をまず手に入れ、その知識に基づきながら自己矜持としての知的自律性を確立していくべきであると考えている。
ⓓ 人間は自己矜持として知的自律性を生まれながらにもっているので、人に頼るよりもまずは何事も自らで吟味すべきであると考えている。
ⓔ 人間の能力には限界があり、すべてを自分で理解できないが、自己矜持としての知的自律性のもと理解する姿勢が大切であると考えている。

問三　空欄 X に入る表現として最も適切なものを、次の選択肢から一つ選び、解答欄の記号をマークしなさい。解答番号は 5 。

ⓐ いったん白い目で見て、冷淡に捉えること
ⓑ いったん水に流し、なかったことにすること
ⓒ いったん鼻で笑い、取り合わないこと
ⓓ いったん括弧で括り、脇に置くこと
ⓔ いったん虚仮にし、あなどること

問四　本文中には次の文が脱落している。この文が入る箇所として最も適切なものを、次の選択肢から一つ選び、解答欄の記号をマークしなさい。解答番号は 6 。

この固有の制約があるため、個人が一つひとつの信念を正当化したとしても、必ずしも真理に到達することは保証されない。

ⓐ【①】
ⓑ【②】
ⓒ【③】
ⓓ【④】
ⓔ【⑤】

問五　傍線部B「知的に自律する」とあるが、これに関してフリッカーはどのように考えているのか。その説明として最も適切なものを、次の選択肢から一つ選び、解答欄の記号をマークしなさい。解答番号は 7 。

ⓐ 他者の言葉を何でもかんでも疑うのではなく、社会的に信用されている者の発言には原則的には依拠すべきであると考えている。
ⓑ どのような対応が適切であるのかという手順は存在しないので、まずは自分の頭を使って検討する方が好ましいと考えている。
ⓒ 状況が変われば信用すべき情報も変わるので、情報ではなく全面的に信用できる人の確保に全力を尽くすべきであると考えている。
ⓓ 他者の発言には嘘も交じっているが、自分の認知作業も不確かなので、とにかく信用に足る情報を収集することであると考えている。
ⓔ 人間は全能の存在者ではないので、様々なことを勘案しながら信用すべきかどうかを判断するようにした方がよいと考えている。

問六　空欄 Y に入る表現として最も適切なものを、次の選択肢から一つ選び、解答欄の記号をマークしなさい。解答番号は 8 。

ⓐ レトリック
ⓑ マニュアル
ⓒ テクノロジー
ⓓ パラドックス
ⓔ コンセプト

問七　空欄 Z に入る表現として最も適切なものを、次の選択肢から一つ選び、解答欄の記号をマークしなさい。解答番号は 9 。

ⓐ 認識的権威と言われている人の話を受動的に受け入れる
ⓑ 全能であると言われている人の話を畏敬の念をもって聞く
ⓒ 知的に自律していると言われている人の話を絶対化して信用する
ⓓ 信頼できると言われている人の話を眉唾物として捉える
ⓔ 合理的な意見を述べると言われている人の話に果敢に反論する

問八　本文の内容と合致しているものを、次の選択肢から一つ選び、解答欄の記号をマークしなさい。解答番号は 10 。

ⓐ 専門家は権威主義的であるので、信用することなく、つねに市民として距離をとっておくに越したことはない。
ⓑ 人間にはさまざまな制約が課されているので、全能の存在者である神に帰依するというのが賢明である。
ⓒ 様々な他者とともに生きる私たちにとって、自己を常に省みながら自分自身で考えることが必要である。
ⓓ デカルトは自分が全能だと信じていたために、『方法序説』の中であらゆることを懐疑しようと考えた。
ⓔ 記憶力や認知作業の能力には個人差があるので、その能力に劣っている者は優れた者に頼る方がよい。

二　次の文章は、電車やバスにベビーカーを畳まずに乗り入れ、それが他の乗客の妨げになっているという出来事について書かれたものである。これを読んで、後の**問一**～**六**に答えなさい。

原則というのは常識に基づいているので、誰もわざわざ問題にしません。いわば常識は数式です。そこに値を代入したら「迷惑」「ワガママ」と［X］に弾（はじ）き出されるようなものなので、答えに目はいっても計算の過程にはなかなか関心が払われません。

深くものごとを感じたり考えたりしなくとも、自動的に自他の振る舞いについてラベリングされるのは、「社会的に許されるかどうか」を計算するアルゴリズム（注1）めいた固定観念が私たちに内蔵されているからです。そのため常識に則（のっと）って算出された結果、ベビーカーの乗り入れは、迷惑でワガママだと非難に値することに自然となってしまうのでしょう。

なぜ「自然となってしまう」かと言うと、文化という癖が私たちの考え方や行動のあり方に大いに影響を与えているからです。それは「みんな」との調和を重んじるといった、個人よりもシステムを優先し、協調性を大事にする考え方と言い換えられます。この社会では、迷惑やワガママであるかどうかが特筆されるべきことなのです。

それにしても「A文化が癖でしかない」と言ったところで、なかなか実感が持てないかもしれません。たとえば食事の際、箸でご飯を食べ、人と話すにあたって日本語を話すことは当たり前すぎるので、これが癖とはトウテイ（ア）思えないでしょう。

しかし、ナイフとフォークを使ったり、手づかみで食べる習慣を持つ人と接すれば、箸で食べるのもまた風習でしかないことがわかります。外国人と話せば、母語はたまたま限定された環境で生まれ育ったから身に付いたのだということがわかります。癖は食事の作法や言語に限らず、ものの考えや生活観、身体観という意識できないところにも及んでいます。それが私たちの考え方のハバ（イ）や振る舞いを決めていたりすることに気づくのは自分とは異なる癖、つまりは異質な文化と触れ合ったときです。

B以前、私はフランス人に長期にわたりインタビューをしたことがあります。彼は折に触れて「イエスと言うのは他人への従属を意味する。ノーと言うこと、『私はそうではない』と言うことから人間の自由は始まるのだ」と話していました。もちろん彼の捉え方がフランスを代表するものではありませんが、「フランスでは……」と彼自身が発言していたことを踏まえると、ある種の典型的な考え方なのかもしれません。こうした見解にフランスと日本の文化の大きな違いを感じるでしょう。

特に印象に残ったのは、彼は社会を枠組みの決まったものでも、何が何でも従うべきものでもなく、あくまで動的なものとして捉えていたことです。いつだって私たちの力で変えることができる。だから、現状に対して「ノー」と言うことは、個人が社会を動かしていく上での原動力となるので

す。迷惑であるか、ワガママであるかを最も考慮しなくてはならないという発想が彼に見当たりませんでした。

日本はノーよりもイエスを良しとします。しかも往々にして曖昧（あいまい）な形でそっと表します。それが日本の文化の特徴だと頭では理解しつつも、彼は日本滞在中に経験したイエスともノーともはっきりしない、成り行きの見えない会話の色合いに、しばしば納得しかねる表情を浮かべていました。

一方、私はと言えば面前（めんぜん）ではっきりと「ノー」を告げる彼の態度に「気まずさを覚えないのだろうか？」とか「生じた軋轢（あつれき）をそのたびに解決することにストレスを感じないのだろうか？」と思ってしまうのでした。やはり自分に備わる文化という癖からすれば、フランス人の振る舞いは過剰に見え、向こうからはこちらの態度が［Y］に見えるのです。

異議を唱えるのは個性の証（あかし）だし、意見の違いがあって当たり前だ。それこそが多様性を保証する。そういう考え方を常識とするフランスと比べると、この島では空気を読んだり、みんなとの同調性を重んじる文化がとても強いと言えます。そのことが良いように作用することもあれば、同調圧力として「［Z］」というような、あまり愉快ではない状況を生み出す原因になりもします。

たとえば「こういうことが問題だ」と提示したとき、その問題に着目し、「じゃあどうすればいいだろうか」と考えを出し合うのではなく、「ことさら問題にするおまえがおかしい」「生意気だ」と怒られたり、「調和を乱そうとするな」と異なる意見を口にすることそのものを咎（とが）められる。家庭や学校、職場で自身の考えを尊重されることも、耳を傾けられることもなく、端から拒絶されてしまった体験を誰しも持っているのではないでしょうか。それくらいこの社会における同調性は強いと言えます。

だからと言って「同調性の強さがモヤモヤの原因だ。安易に他人に合わせなければいいんだ」と言えば済む話でしょうか。意図せずに生まれてしまうのが同調性ならば、なおのことそれがどこから来ているのかが明らかにならないと、自分の置かれた状況も身の振り方もわからないままです。

（尹雄大『モヤモヤの正体――迷惑とワガママの呪いを解く』による。設問の関係上、本文を改めたところがある。）

（注1）アルゴリズム――問題を解決するための手順・計算方法のこと。

問一　傍線部ア・イの漢字と同じ漢字を含むものを、次の各群の選択肢からそれぞれ一つずつ選び、解答欄の記号をマークしなさい。解答番号は、ア が 11 、イ が 12 。

ア　トウテイ

ⓐ 社会のテイヘンで生きる
ⓑ 景気がテイメイする
ⓒ 矛盾がロテイする
ⓓ 味がいいとテイヒョウだ
ⓔ 法律にテイショクする

イ　ハバ

ⓐ イップクの清涼剤
ⓑ ゼンプクの信頼を寄せる
ⓒ ボートがテンプクする
ⓓ ごリップクの様子だ
ⓔ 都内にセンプクする

問二　空欄 X ・ Y に入る表現として最も適切なものを、次の各群の選択肢からそれぞれ一つずつ選び、解答欄の記号をマークしなさい。解答番号は、Xが 13 、Yが 14 。

X
ⓐ 論理的
ⓑ 中立的
ⓒ 便宜的
ⓓ 内発的
ⓔ 自動的

Y
ⓐ 不謹慎
ⓑ 不穏当
ⓒ 不可解
ⓓ 不気味
ⓔ 不見識

問三　傍線部A「文化が癖でしかない」とあるが、これはどういうことか。その説明として最も適切なものを次の選択肢から一つ選び、解答欄の記号をマークしなさい。解答番号は 15 。

ⓐ 文化とは、自然と形成されたもののように思われるが、長い時間をかけて先人たちが作り上げた習性であるということ。
ⓑ 文化とは、他者から見たら不合理なものでも、当事者にとっては合理的なものだと信じている習性であるということ。
ⓒ 文化とは、身に付けている者にとっては自明なものではあるが、たゆまぬ努力を積み上げて得た習性であるということ。
ⓓ 文化とは、他の文化と比較してはじめて気づくことができる、生まれながらに身に付けている習性であるということ。
ⓔ 文化とは、必然性や道理があるわけではないのだが、知らないうちに身に付いてしまっている習性であるということ。

問四　傍線部B「以前、私はフランス人に長期にわたりインタビューをしたことがあります」とあるが、この経験からフランス人をどのような人たちだと捉えているのか。その説明として最も適切なものを、次の選択肢から一つ選び、解答欄の記号をマークしなさい。解答番号は 16 。

ⓐ フランス人は、何事に対してもまずは反対意見を述べ、意見の対立から新しいものを構築しようとする人たちであると捉えた。
ⓑ フランス人は、自分たちの文化に絶対的な誇りを持ち、他の文化の人たちに従うことを良しとしない人たちであると捉えた。
ⓒ フランス人は、他者に付和雷同する姿勢をとるのではなく、「自分は?」と考えて対応しようとする人たちであると捉えた。
ⓓ フランス人は、他者がどのような気持ちであるのかなどに配慮することなく、自分の考えを押し付ける人たちであると捉えた。
ⓔ フランス人は、周囲と力を合わせるのではなく、自分が中心となって社会や組織を動かしていこうとする人たちであると捉えた。

問五　空欄 Z に入る表現として最も適切なものを、次の選択肢から一つ選び、解答欄の記号をマークしなさい。解答番号は 17 。

ⓐ 和して同ぜず
ⓑ 後ろ髪を引かれる
ⓒ 肝胆相照らす
ⓓ 出る杭は打たれる
ⓔ 口裏を合わせる

問六　本文の内容と合致しているものを、次の選択肢から一つ選び、解答欄の記号をマークしなさい。解答番号は 18 。

ⓐ 日本人は人から迷惑をかけられることがもっとも嫌で、自己中心的に物事を考えてしまう国民である。
ⓑ 同調性を重んじる日本人は、自分の考えをはっきりとイエスかノーで言う癖を付けなくてはならない。
ⓒ 日本人は自分の都合のよいように物事を解釈するが、それに対して日本人自身も違和感を覚えている。
ⓓ 自分のおこなったことが社会的に許されるのかどうかをまず気にするのが日本人の一般的傾向である。
ⓔ 日本人はフランスをはじめとする西洋諸国の文化と比較してはじめて自らの文化が劣っていると気づいた。

メ　　モ

試験問題は次に続く。

三　次の文章を読んで、後の問一～六に答えなさい。

「二足の草鞋を履く」ということわざは元々、江戸時代に博打打ちが十手を預かって、器用に立場を変えながら自分と同じ博徒を取り締まる捕吏を兼ねていたことから生まれたことわざだそうなのだが、それはともかくとして、日経新聞というバイタイなのでこういう機会に敢えて言っておきたいのだが、私は自分が「二足の草鞋」を、この場合は会社員と小説家という意味だが、その二つの立場を器用に使い分けて、両立させているなどと思ったことは今まで一度もない。

二〇〇七年に文藝賞という小説の新人賞を頂いて作家としてデビューすることが決まったとき、人並みに本好きではあったが文学青年でもなく、X　苦節何十年で小説家を目指してきたわけでもない私は受賞の喜びを口にしながらも内心、「ちょっとまずいことになったかもな……」という思いがあった。とりあえずの半年、一年はまあ良いかも知れない、しかし企業という秩序に守られた、私にとっては馴染み親しんだ世界と、文学というまったく未知の、個性と個性が激しくぶつかり合う野蛮な世界の狭間で、結局どっち付かずになって、いずれ股裂きのようにぼろぼろに引き裂かれてしまうのではないか？　ところがそんなことはなかった、Y　逆だった。じっさいにはやればやるほど二つの世界は私の中で統合されてきている。

昨年東急文化村シュサイのドゥマゴ文学賞を頂き、授賞式には会社の部下も招待したのだが、私のスピーチを聞いた、その中の女性総合職の一人が何気なく言った。「会社の会議でされた話と、同じ話をされていましたね」。自分を変えたいなんていう意思は　Z　、もっと大きな、ポジティヴな流れに身を委ねることの方がよほど大切だ、そんな話を私はそのときした、似たような話を会社でもしたことがあったのかもしれない。

しかし考えてみればそれも当たり前なのだ。場面に応じて使い分けできる部分なんてしょせん表面的な部分に過ぎない、会社員としてであろうと、小説家としてであろうと、更にいえば家庭の父親としてであろうと、使い分けなど絶対にできない部分、変えようにも変えようがないコアな部分こそが、その人がその人である理由なのだから。そしてどんな場面であってもそれが真剣勝負であるならば、そういうコアな部分をさらけ出すしかないのだから。

A「二足の草鞋をどうやって使い分けているのですか？」。取材でもプライベートでも何度となく受けてきた質問だが、フソンと思われかねない危険を承知で敢えて言うならば、それは「会社に出勤するときは何を着ているんですか？　やっぱりスーツですか？　ご自宅ではジーンズにTシャツでしょうか？」という質問を受けているのと、ほとんど変わらない。

もう一つ、しばしばされる質問に「B「いったいいつ、書いているんですか？」というのがある。これもまあ「二足の草鞋」と同じで、私が会社勤めと執筆の両方を続けているので、よほど時間のやりくりが上手いのではないか？　特別な時間管理術のようなものでも実践しているのではないか？　と

いう先入観から来ている質問なのだろうが、ここにも根本的な誤解がある。小説は時間を掛ければ書けるものではない、もう少し丁寧に言うならば、小説を書くためにはもちろん時間が必要なのだが、時間さえあれば小説が書けるというわけではない。

時間管理術なんかよりももっと大事なのは、結局はさっきと同じ話になるのだが、自分としてどうしても譲れない、変えようにも変えられない部分はどこなのか、変えられない部分に対して自分の人生をどのように差し出すのか、その差し出すときの姿勢、腰の低さみたいなことなのだと思う。

（磯﨑憲一郎『金太郎飴（あめ）』磯﨑憲一郎　エッセイ・対談・評論・インタビュー２００７-２０１９』による。設問の関係上、本文を改めたところがある。）

問一　傍線部ア～ウの漢字と同じ漢字を含むものを、次の各群の選択肢からそれぞれ一つずつ選び、解答欄の記号をマークしなさい。解答番号は、アが 19 、イが 20 、ウが 21 。

ア　バイタイ

ⓐ バイメイ行為に走る
ⓑ バイショウ責任を負う
ⓒ バイシン員に選ばれる
ⓓ 細菌をバイヨウする
ⓔ バイシャク人をつとめる

イ　シュサイ

ⓐ 森林をバッサイする
ⓑ 返済をサイソクする
ⓒ 話がサイゲンなく続く
ⓓ 楽しい読み物がマンサイだ
ⓔ けんかをチュウサイする

ウ　フソン

ⓐ ソンショクがない
ⓑ ソンガンを拝する
ⓒ 危急ソンボウのとき
ⓓ 台風で家屋がハソンする
ⓔ テンソン降臨の地

問二　空欄 X ・ Y に入る表現として最も適切なものを、次の選択肢からそれぞれ一つずつ選び、解答欄の記号をマークしなさい。解答番号は、Xが 22 、Yが 23 。

ⓐ しかも
ⓑ だから
ⓒ ましてや
ⓓ つまり
ⓔ むしろ

問三　空欄 Z に入る表現として最も適切なものを、次の選択肢から一つ選び、解答欄の記号をマークしなさい。解答番号は 24 。

ⓐ 身も蓋もない
ⓑ 鼻持ちならない
ⓒ たかが知れている
ⓓ 人口に膾炙(かいしゃ)している
ⓔ 名状しがたい

問四　傍線部A「二足の草鞋をどうやって使い分けているのですか?」とあるが、これをどのような質問であると筆者は受け取っているのか。その説明として最も適切なものを、次の選択肢から一つ選び、解答欄の記号をマークしなさい。解答番号は 25 。

ⓐ 自分が精魂をそそいで書き上げた作品であることを少しも分かっていない、愚かな質問であると受け取っている。
ⓑ 会社員である自分も小説家である自分も結局は自分であることを理解していない、皮相な質問であると受け取っている。
ⓒ 小説の中身ではなく、自分のプライベートなことだけに関心がある、単なる興味本位の質問であると受け取っている。
ⓓ 会社員をしながら小説を書くということ以外に尋ねることがなにもない、浅はかな質問であると受け取っている。
ⓔ 自分が会社員をしながら、その片手間に小説を書いていると、自分のことを非難している質問であると受け取っている。

問五　傍線部B「いったいいつ、書いているんですか?」とあるが、これをどのような質問であると筆者は受け取っているのか。その説明として最も適切なものを、次の選択肢から一つ選び、解答欄の記号をマークしなさい。解答番号は 26 。

ⓐ 固定観念でしか物事を捉えることができない、かわいそうな人の質問であると受け取っている。
ⓑ 時間の管理術なんて言うどうでもよいことを尋ねる、面白味のない質問であると受け取っている。
ⓒ 何事も時間の問題ではなく、やる気の問題であることを悟っていない人の質問であると受け取っている。
ⓓ 会社員とはどのような人種なのかを把握しきれていない、洞察力に欠けた質問であると受け取っている。
ⓔ 小説を書く上で重要なことは何であるのかが根本的に分かっていない質問であると受け取っている。

問六　本文の内容と合致しているものを、次の選択肢から一つ選び、解答欄の記号をマークしなさい。解答番号は 27 。

ⓐ 「二足の草鞋を履く」という非常に困難なことは生半可な努力ではできるものではないと私は考えている。
ⓑ 会社員をしながら小説を書いていたが、「二足の草鞋」を履いていたという意識を私は持っていなかった。
ⓒ 「二足の草鞋を履く」ということを、世間で用いられている意味とは異なった意味で私は捉えていた。
ⓓ 「二足の草鞋」を履かなければならないという重圧に押しつぶされてしまった時期が私にはかつてあった。
ⓔ 確固たるアイデンティティを持ってはじめて「二足の草鞋を履く」ことができると私は考えている。